

取

材が始まって1時間が過ぎたころだ。携帯電話が鳴り、取材中の女性が電話に出た。女性の名は榎田晴美さん。兵庫県西宮市の武庫川団地で生活支援アドバイザーを務める。電話を切った榎田さんが切り出す。

「近くの郵便局で、高齢の女性が茫然自失状態だというんです。すみませんが、ちょっと見てきてもよろしいですか？」

それまで静かに聞き役に徹していた榎田さんは、柔らかな口調で中座する非礼を詫び、慌しく郵便局に走っていった。

榎田さんは20分ほど戻って来た。聞くと、郵便局の椅子に座ったまま数時間動かない60代の女性があったという。心配になった郵便局長が団地の住人ではないかと思い、榎田さんに連絡したのだ。

女性は団地住民ではなかったのだ。榎田さんにもどうすることもできず、郵便局長が警察に通報するのを見届けて取材場所に戻って来たという。取材中に起こったこ

団地住民を見守る「灯台」 兵庫・武庫川団地(1979年・昭和54年)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の
「暮らし」と「まち」

12

の出来事から、榎田さんが団地住民を知り尽くし、地域から信頼を集めていることを知った。

◆マンモス団地の再生

榎田さんの肩書き「生活支援アドバイザー」とは、URが2008年7月に始めたサービスだ。団地に住む高齢者の日常生活をサポートすることを目的に、全国の8団地で試験的に始められた。武庫川団地は、関西地区で唯一アドバイザーが置かれた団地である。

この武庫川団地は、約46ヘクタールの敷地に賃貸と分譲合わせて7200戸を超える世帯を持つ関西屈指の大規模団地である。79年に第一次入居の約1500戸が完成し、賃貸物件の入居がすべて完了したのは7年後の86年。分譲に至っては89年に完了した。一次入居の5年後に阪神電鉄が武庫川線を延伸したことから、規模の大きさがうかがえる。

第一次入居から20年以上経過した武庫川団地は、当初の賑わいは

影をひそめた。高齢化や古くなった間取りなどから、新たな住民が遠のいた。空室率は最大15パーセントに及び、URは団地の再生マネジメントに乗り出した。

団地内商店街のメルカード武庫川を、民間の力を借りて活性化させた。基幹店舗にスーパー、ほかに50店舗以上の専門店や飲食店を配置したことで、住民を近隣の大型ショッピングセンターに奪われることを防いだ。一部の住居やエントランスのリノベーションにも着手。鬱蒼とした緑地や手付かずの公園を開放感あふれる空間に再生した。不足していた駐車場も新たに設置し、家賃も減額して新たな住人の入居を促進させた。再生策は奏功し、現在の空室率は約3パーセントにまで下がった。

生活支援アドバイザーも、団地再生に重要な役割を果たす。2011年のデータでは、60歳以上の世帯は2400戸、3600戸を超える。増え続ける高齢者に長く住んでもらうことをコンセプト

ばいかわかららない。役所に行ってもたらい回し。そんな状況に不安を感じる住民の窓口となり、適切な先を紹介する「つなぎ役」を置くことになったのだ。

◆住民の道先案内人

榎田さんは団地の管理サービス事務所に詰め、月平均40件を超える相談に対応する。もの静かな榎田さんは、聞き役に徹しつつ的確なアドバイスをしてくれると評判だ。かといって、座して相談を待っているばかりではない。そのひとつの取り組みが「あんしんコール」というサービスだ。

あんしんコールの登録者数は現在およそ80人。登録した高齢者に向けて週1回の安否確認電話を入れる。目的は安否確認だが、榎田さんはそれだけにとどめない。

「心がけているのは、住民のみなさんと打ち解けることです」

榎田さんは電話で世間話をするなかで、相手の状況を声だけで感じることができるほど気を配っている。

いつものようにある高齢者宅に電話をかけると、榎田さんは様子がおかしいことに気づいた。「普段より息が荒く、朦朧としているように感じました」

榎田さんは同僚とふたりでその高齢者宅に駆け込んだ。高齢者は高熱を発し、かなり気分が悪そうだった。すぐに病院に通報し、搬送された。後日、榎田さんは高齢者の息子から連絡を受けた。「ノロウイルスだったようなんです。搬送が遅れたら、万が一のこともあったかもしれません。すぐに駆けつけてくれてよかったです」

榎田さんは、管理役として団地に詰めるUR職員の堀内幸次郎さんと一緒に、水彩画教室などのイベントも仕掛ける。参加した高齢者は嬉しそうに話すという。「連絡先を交換したのよ」

「あの人が申し込んだと聞いたから、私も参加しようかしら」

ご自身でもさまざまな取り組みをする堀内さんはこう語る。「榎田さんの存在が、団地の新た

なネットワークの基点になっているような気がしますね」

榎田さんがいることで、団地住民に安心感が増えた。相談には行かないが「そこにいる」ことは知っているという住民も多い。まるで灯台だ。船乗りにとって、灯台が港に入るとき道の標となるように、いざというときの「道先案内人」として、榎田さんが団地に存在することそのものに意味があるのだ。榎田さんはこう言う。

「この仕事にマニュアルはありません。ひとりひとりの悩みは異なるので、日々勉強しながら、誠意をもって対応しなければならぬ」と気が引き締まる思いです」

現在、生活支援アドバイザーは全国37カ所の団地に配置されている。今後ますます進む高齢化社会では、

榎田さんのような存在が強く求められるのではないかと。



武庫川団地でネットワークの基点となる榎田晴美さん

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社